

平成29年産

飼料用米栽培概要

平成29年2月8日～10日



ふくおか嘉穂 農産流通課

飼料用米栽培の課題と解決に向けた対策

平成28年産の課題

①「穂枯れ」症状による収量の低下

- 「ごま葉枯れ病」が起因して、「紋枯病」「いもち病」が発生

②肥料施肥

- 施肥基準量の投入徹底
- 穂肥時期・量(2回実施)の徹底

③田植え時期、水管理

- 晩限を過ぎた田植
- 田植後から一貫した湛水状態(溜めっぱなしの状態)
- 収穫前の早期落水

平成29年産に向けた対策

P.5~

- 種子消毒の改善
- 適期防除

P.7

- 施肥基準に沿った肥料の投入

P.8

- 適期田植による生育量の確保
- 栽培ステージに沿った水管理
[田植後の水管理・中干し]
[間断かん水落水時期]

P.9~

- ~新規採用剤の紹介~
- 除草剤、補正防除剤

☆平成28年産の課題を踏まえ
平成29年産の対策を行いましょ！

①飼料用米の取組みと栽培概要

不作付地などの戦略作物として取組み、米価下落分は飼料用米でカバーするため、
交付金最大額105,000円/10aを目指す。

栽培概要

1. 新規需要米（飼料用米）品種

品種名：西海203号「ミスホチカラ」・・・【JA契約者へ種子販売】

2. 栽培

(1) 移植：6月10～20日に行う。※生育量の確保

(2) 育苗：一般の米と同様20～25日苗。

(3) 収穫時期：晩生種であるため収穫は10月下旬～。

(4) 栽培条件：成熟期が遅いため、生育後半まで水が確保できる地域。

3. CE利用料金生粉 19,440円/t（税込）

（水分29%以上は1%に対し、615円（税込）の加算となります。）

※利用料金は、収穫年の12月に請求決済の予定。飼料用米の販売は、収穫翌年からの販売になるため販売代金が受領できない期間が発生します。

このことから、販売代金や流通コストを勘案し12月を目途に品代金の概算金のお支払いを予定しています。

4. 出荷契約

飼料用米の出荷契約は5月中旬～下旬に行います。契約締結後の面積変更及び生産地変更は出来ません。

○不正流通防止及びトレーサビリティ重視の観点から、JA販売契約分の飼料用米は全量JAカントリーエレベーターへ出荷。（生粉荷受）

②平成28年産(昨年度)の飼料用米生育概況と課題

育苗期間中

○28年の育苗期間は、高温で推移した事から、苗の肥料消費が早まり、「ごま葉枯病」が例年より多く発生。



田植～出穂時期

○梅雨明け後出穂期までは降雨が少なく、気温が高い状況が続いた影響で、生育は平年より5～7日程度早くなった。これにより、肥料の溶出が早まり本田でも「ごま葉枯病」が例年より多く発生。



出穂時期～登熟期

○出穂期以降は降雨が増え、日照時間が少なくなり、気温は平年並みとなった。
病害虫としては、生育期後半「紋枯病」「いもち病」が一部で発生、また穂が枯れる状態となり単収低下の要因となった。

平成29年産飼料用米は“穂枯れ”の対策が必要

③平成28年産に発生した飼料用米“穂枯れ”の要因

【収穫時期】
平成28年産飼料用米
収穫時期のようす



●生育期後半、止葉に紋枯病が発生、いもち病も発生した事で、「しいな粉」となった。

●穂が“折れて”下に曲がる状態となり、コンバインの収穫ロス（こぼれ粉）となった。

➢低収の要因である穂枯れは、「紋枯病」や「いもち病」の発生によるものと考えられる。
しかし、紋枯病といもち病が発生した要因としては・・・
「ごま葉枯病」の多発で稲体の抵抗性が低下した事が大きな原因と考えられる。

※福岡県農業総合試験場も同様の見解

以上の点から“ごま葉枯病”の対策を行う事が重要・・・次Pへ

④平成29年産飼料用米“ごま葉枯病”対策

ポイント 1

①「穂枯れ」症状による収量の低下

【ごま葉枯病発生の主な発生要因】

- ①窒素、リン酸、カリなどが溶脱した老朽化水田
- ②養分保持力の小さい浅耕土やや砂質土壌「秋落田」

ごま葉枯病の対策

- ①肥料切れが発生を助長するので、肥料基準量を必ず投入する。
- ②常発田では穂ばらみ期を目途に防除を実施する。※状況に応じて稲作情報を発信します。
- ③種子消毒の改善。～ベンレートT水和剤20を使用～

★ごま葉枯れ病対策(種子消毒)
「テクリードフロアブル」+「スミチオン乳剤」に加え
「ベンレートT水和剤20」による種子消毒を実施!!

「ベンレートT水和剤20」による種子消毒

【種子と薬剤、水の割合：200倍】

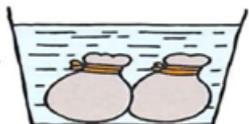
乾燥種子 1kg = ベンレートT水和剤20 10g = 水 2リットル

※水は、種子量の2倍(リットル)

【浸漬】

例) 種子20kgの薬液を作る場合

種子20kg : ベンレートT水和剤 200g 水40リットル



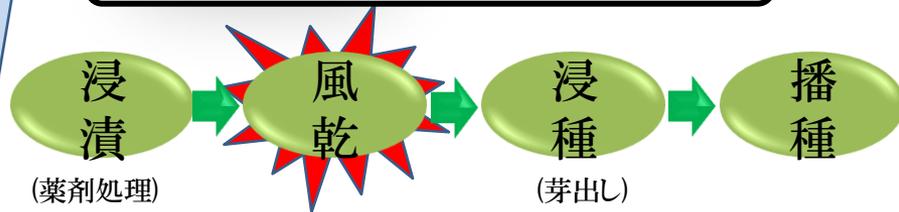
○種子の浸漬は、24時間行う。
※浸漬中の換水はしない。

【浸種～催芽】

▼24～48時間の薬剤浸漬後、風乾する▼
～パレット等を利用して行う～
(種籾の水切りは完全に行う。4～5時間以上)



風乾後に浸種(芽出し)する。



⑤平成29年産飼料用米防除体系

【種子消毒】

(テクリードCフロアブル+スミチオン乳剤)

+
ベンレートT水和剤20^{★新}を使用
☆ごま葉枯病対策

【箱施薬】

デジタルパウアー箱粒剤(移植3日前~移植当日)
☆ウンカ類(縞葉枯病対策等)のため必ず使用

【初期一発除草剤】①~③の内、いずれか1つを選択

- ①サラブレッド粒、フロアブル、ジャンボ剤
- ②ガンガン豆つぶ^{★新}
- ③パワーウルフ1キロ粒剤

【補正防除】殺虫・殺菌剤 ※詳細は「栽培ごよみ」

- いもち病、紋枯病・・・ダブルカットバリダ剤
- いもち病・・・コラトップ剤
- いもち病、紋枯病、稲こうじ病、ウンカ類
・・・ゴウケツモンスター粒剤^{★新}
- ウンカ類・・・スタークル豆つぶ、トレボン剤

【稲こうじ病防除】

- ・Zボルドー粉剤DL^{★新}
- ・ドイツボルドーA
- ・モンガリット粒剤(紋枯病にも効果あり)

注意①

「播種同時処理」不可

※薬害により苗が枯死する

注意②

J A育苗センター飼料用米苗は
箱施薬不使用

※苗購入者各自で施用する

注意③

ミスホチカラの除草剤はサラブ
レッドKAI、ガンガン豆つぶ、パ
ワーウルフを必ず使用する

【補正防除】除草剤

- ノビエ・・・クリンチャー剤
- 広葉雑草・ノビエ・・・クリンチャーバスME
- 広葉雑草・・・バサグラン剤
- 水田雑草(イネ科除く)・・・2・4-Dアミン塩

☆補正防除は発生に応じて随時情報をお伝えします

稲こうじ病防除は、出穂20日前
に必ず散布する

これ以降は、薬害が発生する

●気象条件は毎年異なります。病虫害の発生に応じて随時稲作情報をJAより発信します

⑥平成29年産飼料用米肥料体系

ポイント 2

②肥料施肥

【基肥・穂肥の分施肥体系】

基肥：ベスト444 穂肥：硫安（2回）

【基肥一発肥料体系】

➢ハイエムコート30



【苗箱処理の一発肥料体系】

➢苗箱まかせ

➢基肥＋穂肥体系で施肥する場合は穂肥は2回実施してください。

「ハイエムコート30」は「尿素」を原料とした新銘柄です。

尿素を原料にする事で、昨年まで採用していたエムコート44より10a当たりのコスト低減が可能となります。

「苗箱まかせ」は育苗箱の床土の下（箱底）に施用（1箱当り1.2kg使用）

平成28年度飼料用米(ミズホチカラ)基肥一発肥料比較試験

2016.11.16
飯塚普及指導センター

品種名	設置市町	区	肥料名	移植時期	栽植密度 (株/m ²)	出穂期	成熟期	稈長 (cm)	穂長 (cm)	m ² 当たり 穂数 (本/m ²)	粗玄米重 (kg/10a)
ミズホチカラ	飯塚市(旧穎田町)	試験区	新規肥料	6月15日	15.8	8月30日	10月22日	70	21.6	261	651
ミズホチカラ	飯塚市(旧穎田町)	慣行区	エムコート44	6月15日	15.6	8月30日	10月22日	69	20.4	273	641

試験区：新規尿素入り肥料(30-5-5) 44kg/10a N:13.2
慣行区：エムコート44(22-12-10) 60kg/10a N:13.2

☆栽培試験結果では
“収量も安定”

※肥料に関する注意点

ミズホチカラの特性上、肥料切れになると「ごま葉枯れ病」を発症しやすくなります。生育期間中高温が続いた場合は圃場をよく観察しましょう！

○いもち病とよく類似しているため病斑が見受けられたらJAまたは普及指導Cへご連絡ください。



⑦飼料用米収量向上を目指して・・・

ポイント 3

③田植え時期、水管理

●平成28年産飼料用米は支所間、集落間、個人で単収に大きな差が生じました。単収の向上による交付金最大額105,000円を目指しましょう。

➢病害の発生が単収を引き下げる要因の一部となりましたが、28年産でも高い単収であった栽培者は多数存在・・・
以下の点については見直してみましょう。

- ①田植日・・・6月10日～20日
- ②施肥・・・基準量を施肥
- ③水管理・・・中干、幼穂形成期

～田植日による単収～

○6月11日・・・743kg

○6月13日・・・733kg

○6月12日・・・672kg

➢その他600kg以上の単収であった栽培者では6月15日前後の田植が多かった。

○6月28日・・・489kg

○6月27日・・・459kg

○6月26日・・・464kg

➢その他300kg台の単収では6月末から7月に入ってから田植えが見られた。

【中干しの程度】

土壌条件	中干しの程度
普通乾田 (標準)	5～7日間隔で田面に小さい亀裂が入る程度に干す
水はけの良い田 (砂質浅耕田)	3～5日間隔で弱めに干す (溝に水が少し残る程度)
水はけが悪い田 (半質田・粘質田)	7～10日間隔で強めに干す (長靴が沈まない程度)

～幼穂形成期の水管理～

○中干し後は、間断かん水をおこない、根を健全に保つようにします。穂ばらみ期(出穂の10～7日前)から出穂後7～10日は、稲体の水分蒸散量と酸素の消費量がともに最大となり、水を最も必要とする時期です。この時期は土壌が水分不足にならないようにします。その後は酸素供給も兼ねて、適切な間断かん水をおこなってください。

・・・さらに
水はけの悪い酸欠水田では硫化水素ガスが発生し、根の活力が低下(ひどければ根腐れ)します。田植時～収穫前まで水管理を適切に行いましょう。

☆6月10～20日の田植と適切な水管理による収量アップを目指しましょう！

⑧飼料用米稲作暦より資材の一部紹介 ～初期一発除草剤～

○低コスト除草剤

水稲用一発処理除草剤
サラブレッドKAI 1キロ粒剤

低コスト大型移植同時除草剤

JAだけの
50kg規格・5ha分

※注意: 特別栽培米には使用できません。



10kg袋が5袋入っています。

**1kg(10a)あたり
 1,876円(税込)**

ピラクロニル+オキサジクロメホンで
 ノビエに長効き! コナギも大得意!

有効成分	有効成分名	有効成分	1kg中の有効成分	1kg中の有効成分	1kg中の有効成分	1kg中の有効成分
ピラクロニル	ピラクロニル	ピラクロニル	100g	100g	100g	100g
オキサジクロメホン	オキサジクロメホン	オキサジクロメホン	100g	100g	100g	100g

JAグループ 農協 協栄 経済連 協友アグリ株式会社

▼ 散布方法に応じて選択

○散布機を必要としない除草剤

JAふくおか嘉穂稲作ごよみ新規掲載品目

農林水産省登録第23535号



特長

- 2成分の一発処理除草剤で、特裁米にも使用できます。
- 新規成分「フェ/キサスルホン」配合で/ヒエに高い効果を示します。
- 豆つぶ製剤により、250gと計量で、拡散性にも優れます。
- 田植え後3日～ヒエ2.5葉期まで使えます。

■豆つぶ除草剤の散布方法



ひしゃく
散布

ひしゃく散布

袋からバケツや肥料桶に豆つぶ剤を移し、ひしゃくで撒いていきます。15メートル程豆つぶが飛び、短辺50mの圃場なら中に入らず、畔からの散布ができます。



豆つぶ剤

袋のまま散布

袋の口をあけて、圃場に向かって袋を振ることで70アールのように豆つぶ剤の散布が可能です。短辺30mの圃場なら中に入らず、畔からの散布ができます。

おつ、
70アールにたいに
散布できる!



手まき散布

袋から直接またはバケツなどに移してから手に取り圃場に向かって撒いていきます。短辺30mの圃場なら中に入らず、畔からの散布ができます。



○JAでは除草剤の“効果”“コスト”の面から採用する剤の効果試験を毎年実施しています。29年産についても、除草剤の他様々な効果試験を行います。

⑨飼料用米稲作暦より新規採用剤のご紹介～稲こうじ病対策～

○粉剤による稲こうじ病対策剤

農林水産省登録 第21112号

稲こうじ病の防除に

Zボルダー 粉剤DL

ゼット

墨黒穂病

稲こうじ病

※昨年採用していた撒粉ボルダーより変更

○稲こうじ病の他“いもち”“紋枯”“ウンカ”防除が1つで出来る

新*小稲用 殺虫殺菌剤

第23707号

ゴウケツモンスター 粒剤

いもち病も、ウンカ類も、ツマグロヨコバイも。粒剤散布でガッチリ守る。

新系統の効き目で、いもち病菌を強力ブロック！
本田過球で、曇いもちから輝いもちまでカバー！
ウンカ類やツマグロヨコバイも、長期間抑える！

いもち

トビイロウンカ 稲葉蝨類

トビイロウンカ

ツマグロヨコバイ

ヒメトビウンカ

さらば、いもち病！

セシロウンカ

トキプロファクト

⑩平成29年産飼料用米栽培 ポイントのまとめ

1. 種子消毒でベンレートT水和剤20を使用し、「ごま葉枯病」対策を実施。
2. 箱施薬は「デジタルバウアー箱粒剤」を使用し、ウンカ類対策を実施。
※移植3日前～移植当日を厳守（播種同時処理は絶対にしない）
3. 初期一発除草剤は「サラブレッド剤」「パワーウルフ粒剤」「ガンガン剤」を使用。一部の除草剤（エーワン剤やキマリテ剤など）をミズホチカラの圃場で使用すると薬害が発生する。
4. 「基肥：ベスト444＋穂肥：硫安」の場合穂肥は2回実施。
5. 田植は6月10～20日で行い、水管理は適切に行う。
除草剤処理時期を除き、水を溜めっぱなしにしない。
(硫化水素による根痛み防止)
6. 飼料用米は主食用米との混植に田植時十分気をつける。 →
7. 稲こうじ病防除のタイミングは出穂20日前までとなっているので稲作情報などを参考に実施。
8. トビイロウンカの防除やその他病害虫防除のタイミングも稲作情報を確認して実施。
9. JAとの出荷契約を締結する飼料用米は全量JA共同乾燥施設へ出荷。



【写真】飼料用米と
主食用米との混植

○その他栽培管理の情報については穂肥時期の現地講習会開催や、稲作情報などで行います。

⑪圃場に関する注意点

作付地変更の場合に注意!!

飼料用米の作付圃場を昨年産から変更される方はご注意ください。

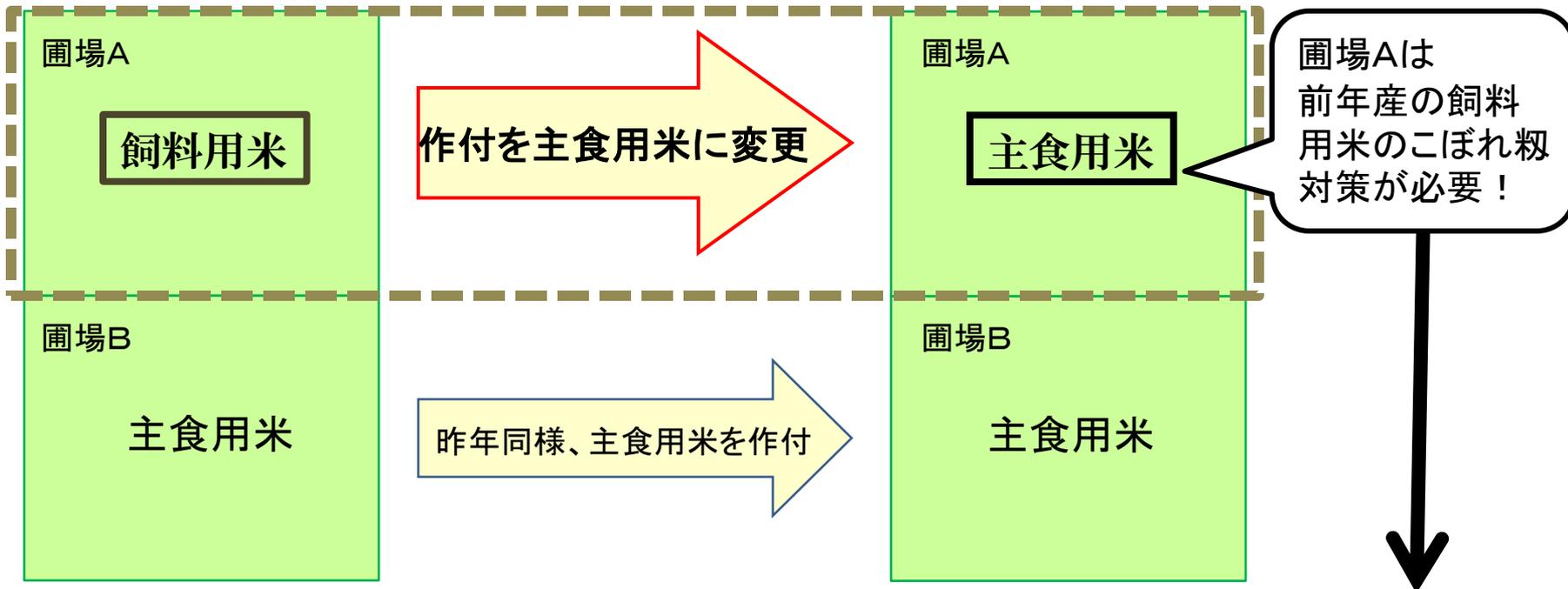
前年の飼料用米の収穫作業時に生じた「こぼれ粃」が代かき後に芽を出し本年の主食用米に混入する可能性があります。

対策として本年主食用米の圃場に使用する初期一発除草剤は“**「キマリテ剤」**”を使用します。

※飼料用米(ミズホチカラ)には使用しないで下さい。

≪平成28年産(前年)≫

≪平成29年産(当年)≫



【こぼれ粃対策】

○前年に飼料用米を作付していた圃場に本年主食用米を作付する場合は、

“こぼれ粃対策”として**キマリテ剤の散布**が必要です!

※ミズホチカラ(飼料用米)は、除草剤の成分「ベンゾピシロン、メトリン及びテフルリオン」に対し感受性が高く、薬害で枯れます。この特性を逆に利用して、混入防止対策を行います!